

第 13 回ようざん認知症介護事例発表会

2021 年 7 月 27 日



目次

オーダーメイドの接遇を目指して

グループホームようざん飯塚 p.1

『忘れっぽいけど 私 幸せだよ』

～ 60代で認知症を発症した元トップ営業レディ～

デイサービスようざん並榎 p.4

「寄り添い人として」

ケアサポートセンターようざん中居 p.9

家族のように～我が家に勝る所なし～声にならないニーズを探る

ケアサポートセンターようざん大類 p.12

一緒に笑おうよ

スーパーデイようざん双葉 p.17

私たちができること ～在宅生活継続への支援～

ケアサポートセンターようざん石原 p.21

「ばあさん」充実した暮らしを送りたい

ショートステようざん p.26

自由気ままな生活が大好き～本人の幸せのための支援～

ケアサポートセンターようざん栗崎 p.31

「その人を知ることによってそれは問題行動ではなくなった」～ 観察力と理解力の大事さ ～

特別養護老人ホームアダージオ p.36

「その人らしさ」を支える

グループホームようざん八幡原 p.40

A様の心に「バラが咲いた」日～初期認知症利用者様に対するケアの実践～

デイサービスぼから p.43

オーダーメイドの接遇を目指して

グループホームようざん飯塚

吉野 容子

齋藤 記代

【はじめに】

『接遇』とは、おもてなしの心を持って相手に接するという意味を持ちます。

利用者様との円滑なコミュニケーションや信頼関係を築くためには必要不可欠で、よりよい接遇は利用者様の満足や喜びへつながります。

介護施設における接遇は、高齢になり日常生活を安心して送るために誰かのサポートが必要になった方の『尊厳を守ること』にもつながり、接遇のマナーを守って利用者様と接することによって信頼関係が築きやすくなり、スムーズなケアを行えることにより『安心を守ること』にもつながります。

今回グループホームようざん飯塚では、利用者様お一人お一人に合わせた『オーダーメイドの接遇』を目指して質の高いケアを行っていきたいと考えました。そのきっかけは、失語があり、多動で意思の疎通が難しい利用者様の想いをどのように理解したらよいかを検討したことでした。

【利用者様紹介】

A 様 90 歳 女性 要介護度 3

生活歴 吉井町で5人兄弟の長女として生まれる。責任感が強く働きもの。小学校の教師を長年務められ、一番大変な1年生の担任をずっと任されていた。人が好きでお世話好き。ご夫婦で教師をされており、忙しいながらも趣味にも励まれ、和歌や俳句もお好きなスーパーウーマン。お子様の育児日記を丁寧につけておられ、愛情の深い方です。

【グループホームでの A 様のご様子】

A 様は一日中ホール内を歩いておられ、洗面所では90歳の小柄な女性とは思えない力で蛇口を曲げてしまわれ、床を水浸しにされ、テレビやパソコンを引き倒されてしまいます。掲示物を次から次へとはがし、食事を座ってゆっくり召し上がることが難しく、お茶碗やお茶の入ったコップを持ったまま歩き回られ、他の利用者様の席へ行きその方のお食事を召し上がられます。

職員は、「危険だから」、「他の方のものだから」、と思わず大きな声を出してしまったり、椅子に座って頂こうと席まで案内するのですが、A 様はご自分の行動を邪魔されたと感じるのか、職員の背中を叩いたり、大声で怒り出されます。

片時も目が離せず、危険がないように見守りながら後をついて歩くような日々ですが、職

員と一緒にソファに座っている時などには、「疲れたでしょ？少し休みな」「あぁいい子だね。」と頭をなでてくれる、笑顔の素敵なども優しい利用者様です。

【課題と取り組み】

言葉でのコミュニケーションが困難な A 様。A 様の行動や気持ちを理解するためにまず私たちが行ったのは、「相手を否定せず、すべてを受け入れる」ことでした。

A 様の行動も言葉も、怒りの気持ちも、うまく伝えられない悔しさも、無理にご機嫌を取らずに、そのまま受け入れよう。

その上で、口調、言葉遣い、声の大きさ、声のトーン、歩きかた、触れ方、ありとあらゆることを細やかに、オーダーメイドのように個々に合わせた接遇で、日々ケアを行って行くことにしました。それを職員全員が同じように行えるよう、情報の共有を行い、お互いの行動を見直し、日々の変化に合わせて柔軟に対応し続けました。

【考察とまとめ】

ありのままを受け入れることは、とても難しいことでした。それは、A 様に対して「安全で健康に生活して欲しい、清潔になって欲しい、美味しいものを食べて欲しい、自分らしく生活して欲しい」と言う気持ちがあるからです。そして、そんな自分の思いを受け入れてもらえないことで、悩んだり、苛立ったり、怒りの気持ちが湧いてしまうことに気がつきました。まずは、相手の気持ちにより添うことを徹底して行っていこう。A 様の行動を肯定し、一緒に同じものを見て、同じ気持ちを共有し続けたことで、私たちの気持ちが、A 様に届きやすくなったように感じます。

【最後に】

外部の評価機関によるグループホーム飯塚の評価結果をご紹介します。

「外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)」

「利用者本人の今を大切に、ありのままを受け入れようと努力しているグループホームである。本人から発せられる言葉や行動を否定しない支援を実践している。これは、事業所の理念にもつながり、理念に基づいて具現化しよう、実践しようとしている姿勢がうかがえた。また、食堂から利用者と職員の話し声が聞こえてきたが、尊敬や感謝の言葉も聞かれ、利用者を受け入れようとする職員の言動が感じられた。利用者を縁あって一緒に過ごしている人と位置づけ、安心して生活できる環境を提供しようとしている努力がうかがえた」

ありのままを見ていただき、自分たちのいいところと悪いところをしっかりと把握していこう、と臨んだ外部評価でしたが、私たちの努力が外部の方から評価されたことは、私たちの自信にもつながりました。

コロナの影響も少なからずある状況で、面会も思うように出来ずご家族様も心配や不安

を感じておられるかと思いますが、「お任せください！！」と自信を持って伝えたいと思います。これからも『オーダーメイドの接遇』で、ぴったりサイズの心地よい服のように、利用者様一人一人の想いに丁寧に寄り添って行きたいと思います。

『 忘れっぽいけど 私 幸せだよ 』

～ 60代で認知症を発症した元トップ営業レディー～

デイサービスようざん並榎
森 由紀

【はじめに】

もし自分の家族が突然60代で認知症と診断されたら、皆さんは受け入れられる自信がありますか？本人だけでなく、家族の生活への影響が大きく変わってゆくことでしょう。

「なんでそんなことも出来ないんだ」

「そんな物持って行かなくてもいい」

A様は、認知症の進行により 今では着替える行為も忘れてしまいました。

デイのバックの中に、ホチキスや、トイレットペーパーを時にはお仏壇の物が入っています。そんな家族の心配とは裏腹に、A様はいつも明るく笑顔です。

「おはよう。きょうは ようざんに行くのね～」と送迎車に乗り込む A 様と家族の疲れた姿がとても対照的です。

A 様の明るさを失わない取り組みと、家族の精神的な負担を少しでも軽くする取り組みを発表させていただきます。

【利用者様紹介】

- ・ A 様 74歳 女性 要介護2
- ・ 週5回デイサービス利用
- ・ 既往歴 脳血管性認知症、アルツハイマー型認知症
- ・ 日常生活動作(ADL)に問題なし
- ・ 服薬状況 レミニール（認知症薬） 1.2ミリ2錠服薬
アジバル （血圧）

【生活歴】

A 様は5人兄弟姉妹の次女として下仁田町で生まれ育ちました。

結婚前は明るく社交的な性格を生かし、バスガイドをされていました。

結婚して二人のお子さんに恵まれ、お姑さんの協力もあり、結婚後は保険の営業のお仕事さ
れていました。

趣味はお習字で師範の免許もお持ちです。

保険の営業成績は常にトップで、成績優秀で様々な賞状を授与され大きな功績を残された
「トップ営業レディー」として頑張ってきました。

何よりも保険の営業の仕事が生きがいで30年間仕事を続けられました。

〔そんなA様に異変が〕

60代後半から

人よりも物忘れが目立ってきて営業のお仕事にも支障が出始めました。

心配して受診をすると平成30年11月に血管性認知症と診断されました。

69歳で圧迫骨折されそれを機に退職。

現在はお子さんが独立し夫と2人暮らしをされています。

【性格】

- ・明るく、陽気
- ・他者が喜ぶ事が幸せと感じられる
- ・オシャレが好き
- ・社交的で優しい
- ・おしゃべりが好き

A様の主な認知症状

- ・記憶障害 忘れたことに気づいていない。
- ・記銘力の低下 何度も同じことを説明しても記憶することができない。
- ・着衣失行 下着を付けず洋服も裏表違いに着用し外出をしてしまう。
- ・見当識障害 段取りをする料理等はできない、炊飯器をコンロにかけようとする。
- ・判断力の障害 妄想が現れる。
- ・認知機能の障害 行動するための手順や段取りが分からない、混乱する。
- ・何度も繰り返し同じ事を話す。

上記の認知症特有の症状が顕著に見られます。

【利用開始～現在の様子】

令和2年2月より週2回利用開始。利用当初は荷物の有無や帰宅願望、物が盗まれたなどの被害妄想が多く出ていました。ただし、徐々に気の合う他利用者も増えてきて、職員との会話でも冗談混じりの笑い声が多くなっていきました。当初見られた帰宅願望、被害妄想はなくなり「ようざんに来るのが楽しみ」と話され安心の様に思えました。

見えてきました。

しかし！

ご家族様よりご自宅での介護負担が想像以上に大きいとのことで、今年の5月より週2回から週5回利用の要望が出ました。利用回数が増えた事で、今まで見えなかった問題点が沢山見えてきました。

【課題】

1. トイレの一連の動作が理解できない。衣服調節が困難。
2. 夕方症候群が顕著に見られる。

3・夫の介護疲れが見られる。

1. トイレの一連の動作が出来ず、使用済みのトイレットペーを流す行為を忘れて、ポケットやバックにしまいこんでしまう。

《対策》

- ① 安心してトイレを済ませる事が出来る様に介助を行う
- ② 解かりやすくイラストで使用済みのトイレットペーパーを流すパネルを貼り付け見る事により意識付けをする。ご自宅用も作り連携して行う

《結果》

取り組みを行った当初はトイレットペーパーをパネルの中に捨てようとしている様子が見られましたが最近では一度説明をすると「ここね」とトイレの中に捨てることのできる様になりました。介助の拒否もなく「解らなかったから助かったよ」と話されています。

入浴している様子はなく下着も着替えている様子がみられないズボンの上にパンツを履いて来所。

《対策》

- ・デイサービスで週2回入浴施行を開始する
- ・以前はオシャレで複雑な洋服を着衣されていたがA様を尊重しつつ着用しやすい服を選ぶ

・家族より衣服を預かり、デイで専用のタンスを用意。洗濯を行い衣服の管理をする。

《結果》

入浴拒否もなく清潔保持ができています。着衣失行については自尊心を大切に傷つかないように、冗談を言いながら順序を説明し着衣ができ、浴後には「化粧水ある？」と身だしなみを気にされ整容に対しても意欲向上につながりました。洋服はデイサービスで洗濯、管理する事により家族の負担軽減に繋がりました。

2. 夕方になると「バックにお財布を入れてきたのに おかしいわー」「どうやって帰ればいいの？」と夕方症候群が顕著にみられる。

《対策》

- ・お金を支払って帰らなければいけない でもお金がない不安な気持ちを解決する為、領収書を用意する（偽物）

《結果》

領収証を見ると「お金は払ったのね 良かった」と安心されるが、記憶障害により効果は持続せず、何度か繰り返し領収証をみてもらう。不穏がなくなる1番効果があるものは、A様

が好きなお喋りでした。「もう帰る時間。楽しかった」と不穏なく過ごす事ができていました。

【笑顔を絶やさない取り組み】

オシャレに興味はあるものの「めんどくさくて」「もう年だから」と意欲低下。

《対策》

オシャレイベント開催

・オシャレ、整容を意識する事により身体と心にもたらず良い事を説明。テーブルにマネキユア、ネックレスなどを置きオシャレに対する意欲を持ってもらえるように工夫しました。

《結果》

「お化粧してくれるの？久しぶり～」A様の笑顔を沢山引き出す事ができました。楽しまれ帰宅後旦那様に「見て、キレイでしょう」と話されたそうです。「これからはキレイでいたいとね」と自信に満ちていました。整容に対して意欲向上が図れました。しかし、先日、自宅から持ってきたホッチキスを口紅だと思い込み、口紅を塗る動作が見られ、失認が見られます。

【家族の精神的負担軽減と認知症への理解】

認知症への理解が出来ずストレスを抱えている

《対策》

介護でストレスを感じている家族に今の想いを代筆し伝える。介護の理解への本、デイスervisでの写真を添えてお渡しする。

《結果》

A様の気持ちを手紙に綴りご家族に渡すことができ、家族の心にも変化があった様に思えました。それは送迎時の怒鳴り声が聞かれなくなったことが大きな変化でした。

【考察、】

家族はA様が認知症になる前のバリバリ仕事をこなし、輝いていた姿を知っているからこそ、辛くなり、出来ないことへの苛立ちでつい怒鳴ってしまうと話されていました。家族も悩みや辛さを伝えられず悩み苦しんでいました。

現在A様はデイでお風呂に入り、洗濯物も自宅に持ち帰らずに施設で洗っているので家族の負担も軽減できました。

夕食もデイで食べて帰ってくるので、夫の自由になる時間も増えて、以前より気が楽になり、A様に対しても優しく話しかけることが増えてきたそうです。

またデイの様子を写した写真を毎日お渡しすることで、いつも笑顔で楽しそうに過ごしていることが分かり大きな安心感に繋がりました。

認知症はこれからも進むと思いますが、家族の抱えている悩みや課題を共有し、介護職として諦めずサポートすることで、家族の絆も深まればと思います。

「忘れっぽくて」と笑顔で過ごされている中にも不安はあります。その不安を家族の方と協力し理解をする事で取り除き、職員との信頼関係も構築されました。認知症になっても家族は明るく幸せの気持ちで過ごして欲しいと願います。

【まとめ】

A様はトップ営業レディーとして沢山の人と関わって来た日々の中に、コミュニケーション能力や、身だしなみ、挨拶、気遣いなど、経験で培ってきた感性があり、認知症になってもそれは豊かなままです。

A様を見ていると認知症になっても、特に怖い事はないと感じることがあります。

認知症になっても人生を沢山楽しめるからです。

見方や、考え方を变えて、接し方をほんの少しだけ変えれば、その人らしい明るい人生が続いていきます。

忘れてしまっても、その瞬間、瞬間に私たちが手を差し伸べてあげます。

それが私達介護職の努めてであり、私はこの介護職につけて幸せに思います。

「お父さん、いつも気遣ってくれて ありがとう」

「忘れちゃうけど幸せだよ」

「寄り添い人として」

ケアサポートセンターようざん中居

中嶋 誠

岡本はづき

【はじめに】

私は4月に上映された「ケアニン～ ところに咲く花～」をネット上で鑑賞する機会を頂きました。この映画は認知症の人をサポートすることで、家族との関わりも重視しながら支援していく内容の映画でした。「ケアニン」とはケアする人(介護者)のことであり、この映画を鑑賞したことで私はケアを必要としている人に関われる素晴らしさとケアニンとしての意義を改めて見いだせたように思います。

またケアは1人では出来ないこと、チームケアが大切であることを再確認して私たちの施設の「ケアニン」の紹介から始めたいと思います。

ケアサポートセンターようざん中居は全員で18名の介護者で施設の利用者様をサポートしています。内訳はケアマネージャー1名(所長)看護師1名、ドライバー2名、外国人技能実習生1名、他介護者で構成されています。今回の事例発表にあたって最初に試みたことは、職員にアンケートをしたことです。

内容としては対象者は誰に？ 事例内容は？ など書き込んで頂き、職員の思っていることなどを確認して、その中から担当者である私を選出させて頂きました。

【利用様の紹介】

氏名：A様 女性 要介護4

年齢：87歳

既往歴：白内障、高血圧症、軽度認知症障害

【A様の变化】

私は2020年1月12日頃から急に体調が悪くなり、食事も摂れず体力の減退がみられ歩行困難に陥り、5日後に意識喪失にて救急搬送で入院となりました。その時の病名はインフルエンザ肺炎・脱水症で致死となる可能性が高いと医師からの説明を受けました。3カ月の入院で保存的加療を続け、また私の生命力も強かったようで何とか改善がみられたそうです。

その頃から同時に白内障(両眼)の悪化もあり、何で？ どうして？の気持ちが募るばかりでした。

今まで大きな病気もなく入院したことの無かった私が突然に急変したことで現実を受け入れる事が出来ませんでした。何が何だか分からない状況の毎日で精神的にも辛い日々が続いたことを思い出します。

入院中に介護保険申請を行ない、退院後お泊りすることになりました。近所の人に誘われて集ったオレンジカフェの施設「ようざんさん」に、3月19日に病院を退院して直ぐにお世話になりました。当初は白内障で殆ど見えない状態の施設利用で不安でしたが、温かい職員さんの声掛けによる対応で少しずつ不安も解消され前向きに考えられるようになりました。いつも気遣ってくださり孤立しないように周囲の方々の共有空間に入れて貰うことで本来の活発な自分を取り戻すことが出来たように思います。

両眼の白内障の手術も無事に終わり視界も以前に戻ることが出来たことで気持ちも楽になり、入所3カ月経って状態も良好なことからお泊りから通いに変更して頂きました。毎日が自宅からの通いとなり、現在は週3回の利用で自宅の片付けなども出来るようになりました。また以前お付き合いしていた近隣の方々も立ち寄って下さり入院前と変わらない生活に戻りつつあることで、今はホッ！としています。

【利用開始後の様子】

A様が当施設に利用になられた時のことを良く覚えています。レクの時間帯に施設に連れて、直ぐレクに参加されていた時のことを。

利用開始時は体力的には問題はありませんでしたが、余り見えないことから手引き誘導で援助を行ない、夜間はオムツ対応で様子を見ることで安全重視での介助に心がけました。その後、徐々に手引きによるトイレ介助に移行しながら支援をさせて頂きました。A様は見えない状態でも悲観的にもならず、職員の言われることを快く聞き入れて下さり周囲の方々とのコミュニケーションも図って楽しそうに施設生活を過ごされていました。

また、自分の中には「大丈夫、なんとかなる」という思いがあったことで現状を受け入れる事が出来たように思います。

長年にわたり培ったバレーボールの経験からか周囲の利用者様とのチームワークを大切に、ハキハキした声掛けでテーブルの皆様を纏めては洗濯物や行事の工作などを手伝っては明るい雰囲気づくりに貢献しています。ときには利用者様目線で物事を言って下さり、職員では気付かないところを指摘して貰うことで豊かな空間を提供出来る事もありました。

【私たちが感じたこと】

A様は辛い気持ちを表に出さないうで、常に前向きな姿勢を保ちながら生活される様子に感心させられました。それと、職員の皆さんが優しく有り難いといつも感謝して下さる気持ちに、私たちが遣り甲斐を覚えて利用者様一人一人に向き合うことが出来たように思います。

【介護って、なんだろう?!】

A様と接することで、介護者がケアを必要とされる人に寄り添っているのではなく、ケアを必要とする人と介護者が互いに寄り添い合いながら介護は成立しているように思いました。また、寂しさや不安のなかで過ごされている利用者様に、安心を提供できるよう介護者の使命はあるように思います。

私は長年製造業務に携わってきましたが人から感謝をされることは殆どありませんでした。介護者として支援を必要とされる人に援助をすることで「ありがとう」と言われることは自分の存在理由を知ることと、人と人との繋がりを感じる実感を味わえたことでもありました。人生のゴールを迎えようとされる方々(大先輩)に接してケアをすることは自分自身にとって「己の徳を得る最良の道である」と感じています。

【今後のケアサポートセンターようざん中居】

私たちの施設は今まで職員が定着しないことから充実したケアは出来ていなかったと思います。今は職員も定着して若い介護者が増えたことでベテランと新人を含むバランスの良いケアニンで執り行える施設に変わろうとしています。そこで、ようざん中居は「まごころ支援」と名付けて「6Aケア」を掲げました。

- 『6Aとは』
- | | | |
|------|-----------|--------------|
| ①安心 | ④アクティブ | (活発な) |
| ②安全 | ⑤アミューズメント | (娯楽、楽しみ) |
| ③明るく | ⑥アメージング | (驚くべき、素晴らしい) |

今後は職員一同が「まごころ支援」を意識して、楽しくケアに取り組んで貰えることを願っています。

また、今回発信した事例を参考にして支援に取り入れていきたいと思っています。

【A様から】

今回の事例発表にあたって、A様本人からビデオメッセージが届いていますので紹介させていただきます。

【最後に】

ケアを必要としている人がいる限り、私たちは寄り添い合いながら「笑顔」という安心をサポートして参りたいと思います。

マスクを必要としない日が早く訪れますことを願いつつ、本日の事例発表を終了致します。ご清聴ありがとうございました。

家族のように

～我が家に勝る所なし～

声にならないニーズを探る

ケアサポートセンターようざん大類

荻野 正夫

清宮 智通子

<はじめに>

47%・・・この数字が何を表しているかわかりますか？

これは厚生労働省が予想した 2040 年の 65 歳以上の高齢者のうち、未婚者が占める割合です。今後益々増える一人暮らしの高齢者がいつか迎えるかもしれない、昨日出来ていた事が今日は出来なくなるという現実。頼れる身内がなく、不安と孤独に苛まれる日々に埋もれながら、少しずつ変化していく身体と付き合うしかない一人暮らしの高齢者。何ができて何ができない？どんな所でどんな暮らしをしている？ご家族からの十分な情報が得られないまま、一人暮らしの高齢者が介護サービスを受ける事になった時、私達はどの様に関していったらよいのでしょうか？

プライドが高く、困っているであろう事があっても決して口には出さない、一人暮らしの A 様。そんな A 様との現在進行形の手探りの体験について、4つの取組みを交えて発表したいと思います。

<利用者様紹介>

名前：A 様

女性 86 歳 要介護 3

既往歴：認知症・慢性うっ血性心不全・僧帽弁閉鎖不全症

生活歴：三人姉妹の三女として生まれる。二人の姉は既に他界。結婚歴なし。子供なし。

生家で一人暮らしをされている。事務員の仕事を定年まで全うする。

<経緯>

2019年11月、A様が入院していた病院のソーシャルワーカーさんから連絡を受けました。一人暮らしのA様が身の回りの事（食事・服薬・受診・入浴）が難しくなっているようなので、様子を見て行ってほしいとの内容でした。しかし懐疑心の強いA様はなかなか心を開いて下さらず、引き戸はすぐ閉められてしまいました。拒否の日は続き、それはまるで出口のないトンネルに入り込んでしまったかのようなようでした。日を変え、時間を変え、人を変え、

訪問を続けたある日、A様が長年事務員の仕事をされていた事に気付いた職員が放った言葉が、A様の心に届きました。

「ずっとお仕事をされていたそうですね。お手伝いして頂ける事があるかもしれないからお願いしますよ。行きましょう！」

「それじゃあ家に居てもつまらないから行ってみようかな」

こうして通いのサービス（毎日）がスタートしました。

〈ご利用開始〉

4つの困り事について、さっそく改善を試みました。

- ①食事→3食とも苑で提供
- ②入浴→苑で入浴
- ③服薬→苑で管理・服薬介助
- ④定期受診→苑で送迎と受診介助

②～④についてはすぐ解決。しかし、朝食・昼食は問題なく苑で召し上がって頂けましたが、夕方になるにつれ帰宅願望と不穏な様子が見られ、「家に帰っちゃダメなんですか？もう帰して下さい！」と施錠したドアを開けようとしては大きな声で訴え続け、夕食に一切手を付けようとしませんでした。そのため4日目以降は夕食のみ配食としました。夕食を配食にした事で職員への信頼度が増し、夕方の拒否はなくなり笑顔でご帰宅されるようになりました。ところが夕配食に全く手をつけない日が殆どという新たな問題が発生。それに関連し、幾つか問題点が見えてきました。

【問題点】

- ① 配食に全く手をつけない事が多い。
- ② ご帰宅後、近所のコンビニに行かれ、冷凍おにぎりや菓子パンを購入し、ご帰宅後やご来苑前に召し上がってしまう。
- ③ 冷凍おにぎりを冷蔵庫に保管し、いつ解凍したかわからないものを召し上がってしまう。それが原因なのか、朝食が進まなかったり、下痢の日が頻繁にあった。

【取組1】送迎時のチェックと声掛け

- ① 送迎時に電子レンジと冷蔵庫の中を確認し、冷凍食品は冷蔵庫に入れると傷んでしまう
と繰り返し説明、冷蔵庫に入れないよう注意する。
- ② すぐ食べられるようセットし、温かいうちに召し上がって頂くよう声掛けする。

【結果1】

- ① お腹の不調はだいぶ減った。

- ② 食事の摂取率は増加。
- ③ 好き嫌いはあるが、勧めれば箸が動くようになった。

〈不衛生極まりない室内〉

ご自宅に職員の出入りを許可して下さるようになり室内を拝見すると、腐敗した食品や衣類の山の他、汚染したパッドが入ったゴミ袋が複数置かれ異臭を放っていました。

【取組2】環境整備

職員2名が掃除機を持参し日中に訪問、ゴミを撤去し、冷蔵庫内の期限切れの食品は破棄させて頂きました。衣類の一部は苑へ運びタンスに保管、入浴後に備えました。

〈劣悪な睡眠環境が発覚〉

2019年12月の冷たい雨の日、急な発熱で体調を崩されたA様を、受診後ご自宅へお送りし就寝介助する事になりました。しかし1階のお部屋には布団がなく、聞けばこたつで寝ているとの事。畳の上に直に置かれた正方形のこたつには長方形の寸足らずの毛布がかけられ、横になったA様の身体を包み込むほどの長さはありません。枕もなく、辺りに散らばった衣類を重ねてタオルをかけ枕代わりにして寝て頂こうとしましたが、高熱のある方をこんなお部屋に残して帰るのに抵抗があり、苑に連絡、急遽宿泊対応となりました。A様のお宅は2階があり、以前は2階で寝ていらしたようですが、退院後は急な階段を上るのが難しくなり、次第に1階の居間で寝起きするようになったようです。後日所長がお宅へ伺い2階を確認したところ、カビだらけのぼろぼろの布団が置いてあった事がわかりました。

【取組3】寝具の提供

※不要になった布団一式を寄付して頂けることになりました。

【結果3】

ご帰宅後、お部屋に敷かれた布団に驚かれ、「お金を払わなくちゃいけない」とご不安な表情をされていましたが、「市から提供されたんですよ。」と説明するとニコッと微笑み、安心した表情をされました。翌日、寝心地についての感想を聞くと、「おかげさまで、一度もトイレに起きる事もなく、ぐっすり眠れました。」と本当に嬉しそうでした。エアコンは冷房機能のみ、小型の電気ヒーターが置かれていましたが、数日後、前髪を焦がしてしまうアクシデントが発生したため、ヒーターを回収、代わりに湯たんぽを提供させて頂く事としました。

〈夜の排泄が難しいのかも〉

下着を身につけずのご来苑や、ご自宅の洗面器にリハビリパンツが浸っている事がありま

した。捨てようとする、「もったいない！」と拒否があり、紙製で洗濯できないと丁寧に説明、納得して頂き回収させて頂きました。苑では自立でトイレ利用が可能な A 様でしたが、ご自宅のトイレは和式で電気も点かない状態（ヒモを引っ張ってつけるタイプの電気のヒモは切れていました）。ご自宅のトイレは使えているのでしょうか？

【取組 4】

和式便座に乗せて使う、簡易様式トイレを提案。

【結果 4】

「お金がかかるんでしょ？」と取り付け費用を心配されたり、「他人が（家に）入るのはちょっとね・・・」と工事の人を家の中に入れる事への抵抗が強く、「使えているから大丈夫ですよ」とお断りになりました。室内に尿臭が漂っているので、玄関の土間で排尿が行われているのではないかと憶測も飛び交いますが、A 様の承諾なしでは先に進む事はできません。この課題はまだ保留状態です。

〈考察〉

独居の方はご自身で何でもされてきた時間が長かったせいか、誰かに「頼る」「助けを求め」という発想に乏しく、危険な状況に身を置いても気付かないようです。それに加え、認知症を発症していれば困った出来事を忘れてしまうため、第三者に伝えるのも難しく、事故や病気になって初めて気付くという事が多いのではないかと思われました。金銭に関する不安が強く、欲求が芽生えたとしても我慢する事が不安を除く唯一の方法になっているようにも思えました。生きる事が緊張の連続になっており、それがいつしか人への懐疑心に変化して行ったのかもしれませんが。必要な所にお金が使えそうなメンタルケアが今後の課題とも言えるでしょうか。

苑をご利用になった事で、食生活が改善され、暖かい布団で睡眠の質が向上し、体調がよくなり、人への懐疑心が薄れ、表情が豊かになりました。笑顔が増え、今では通いの拒否は皆無です。

〈まとめ〉

今回の事例を通し、独居の利用者様に関わるには、私達の気付きと想像力がとても大切であると感じました。自分が利用者様ご自身なら、あるいはご家族なら、どんな介護どんな支援が必要か？利用者様の生活環境や様子をよく観察し、利用者様の声にならないニーズを探り、私達が声になり、チームで支える事が大切だと感じました。A 様が必要な時に頼ったり甘えたりできるような家族のような存在になる。家族のような気持ちで接していく事が、A 様の大切な我が家がいつまでも安全で心安らぐ場所として機能していく事につながるのではないかと思います。

〈最後に〉

おやつの時間が終わると、廊下を往復されるA様の姿が見られます。「体操は好きじゃないのよ」と気が向いた時しか参加して下さいませんが、「足腰を鍛えないとね」と歩行練習は欠かしません。「演歌は好きじゃないの」というA様は洋楽がお好きとの事。レコードを買ってよく聴いていたというテネシーワルツを、リクエストすると英語で歌って下さいます。個性的なA様、これからも私達と楽しい思い出をたくさん作りましょう！

一緒に笑おうよ

スーパーデイようざん双葉

発表者：猪俣 信子

佐藤 千絢

<はじめに>

平成22年2月1日に、スーパーデイようざん双葉が誕生しました。施設誕生から11年間、管理者が変わっても、職員が変わっても、ご利用者様が変わっても、この11年間、変わらず続けてきたことがあります。それは、「一緒に笑おうよ」という気持ちです。これまで一緒に笑い、時には涙し、過ごした様子をご紹介します。

<施設紹介>

スーパーデイようざん双葉は、認知症対応型通所介護施設になります。1日最大受け入れ12名。朝8:00～ご希望があれば夕食後までご利用することが出来ます。また、365日休みなく営業しております。常時職員5～6人体制で、認知症の方々の食事入浴排泄などのお手伝いをさせていただいております。

認知症対応型という事で、ご利用されている方々は、主治医より認知症と診断された方々が日中過ごされております。

一口に認知症といっても、アルツハイマー型、レビー小体型、前頭側頭葉型などなど、認知症も様々なら、同じアルツハイマーと言ってもご利用者様によりBPSDは様々です。

その人おひとりおひとりに合った関わり方や、声掛け、楽しみ方など、個人個人を大切にケアにあたっています。

<成功体験>

スーパーデイようざん双葉はデイサービスですので、各種体操やレクリエーションなども行っています。その中で意識している事は「成功体験」です。これは、法人で行っている、認知症勉強会の中で学んだ、各種認知症への関わり方で教えて頂いたことです。

確かに、認知症の症状や男女・年齢など個人個人は様々ですが、皆様「すごい！できたね！」と言われた場合と「はい、できましたね」と言われた場合、どちらが嬉しい気持ちになるのでしょうか？

また認知症になってしまうと、今まで出来ていたことが段々と出来なくなっていくます。そんな気持ちに寄り添い、出来た！ありがとう！という気持ちをお伝えすることで、自信回復や、脳の活性化、ひいては認知症の進行防止に繋がっていきます。

認知症になって色々な事を忘れてしまう様になってしまっても、最後まで感情の判断能力は残るといわれています。「なんだか名前や顔は覚えてないけど、この人が一緒にいると嬉しいな」という感情が残る様なコミュニケーションをとることで、安心を感じていた

だく事が大切です。

大切な事は明るく前向きな気持ちで日々過ごしていく事ではないでしょうか？

その成功体験ですが、スーパーデイようざん双葉で行っている一例をご紹介します。

<実践>

昼食前の口腔体操は、誤嚥防止や美味しく昼食を召し上がって頂くために、重要なレクリエーションですが、ここでも成功体験を感じていただくために「パタカラ体操」にも一工夫を行っています。

「パ、から始まる言葉は？」との問いに「パンダ、パン、パスタ…」など答えが返ってきます。その答えに対して、職員からは「すごい！」「沢山出ますね～！」と返答しています。なお、いわゆる答えは短期記憶障害もあり、毎回ほぼ同じです。

ですが、「毎回答えが同じですから、何か違うのありませんか？」と伝えるのと、たとえ毎回同じ答えだとしても「すごい！沢山出ますね！」と喜んであげるのでは、短期記憶障害をお持ちのご利用者様には、褒めてもらえた、何か違う物を考えて答えてみようという前向きな気持ちにさせてあげることが出来ます。

また、ご高齢になり認知症になると、普段我々が何気に行ったり考えたりすることも、難しくなってしまいます。そのため、誰でも出来る、満点主義が大切です。私たちが苦手な事をする際、前向きな気持ちで取り組むことは難しいはず。認知症高齢者はなおさらではないでしょうか？ご本人様が好きな事や、得意な事を前向きに明るく取り組めるようにしています。

<褒める>

認知症の方々とのコミュニケーションでは、褒める事も大変重要な事です。些細な事でも「ありがとう」と感謝の気持ちを持ち、褒めるという事を意識しています。

昼食後の食器拭きですが、ある利用者様が、「私がやるから、いいよ休んでな」と声をかけてくださいます。「ありがとうございます」「一緒にお手伝いさせてください」とお声をかけると、翌日も、翌々日も「私がやるから…」とお手伝いしてくださいます。昨日デイをご利用されたことを忘れても、「ありがとう」の気持ちは伝わり、役割を持ちデイで過ごされている様子が見られます。また、最近の事は覚えていなくても、昔の事はよく覚えている方も沢山いらっしゃいます。食器拭きや洗濯物たたみなど昔の記憶は比較的保たれており、認知症になっても継続して行うことが出来ます。その方その方の得意な事を見つけ、前向きに取り組んで頂ければ、良いコミュニケーションが生まれ、より良い介護へ繋がるのではないのでしょうか？

<有酸素運動>

適度な有酸素運動は、認知機能に良い影響を与えることが知られています。

運動をすると、脳の神経を成長させる BDNF（脳由来神経栄養因子）というタンパク質が海馬（記憶を司る部分）で多く分泌され、海馬の機能維持に効果をもたらすからだと考えられています。

体を動かすと、脳から出た指令を神経が介して筋肉が動き、同時に筋肉から出た信号が脳に伝わって脳を活性化する。つまり脳と筋肉は、相互に刺激し合う重要な関係性なのです。

また、脳が正しく働くためには、絶えず十分な血液が流れている必要があります。高齢者やアルツハイマー型認知症患者の脳では、海馬などで脳血流の低下が見られており、この血流を改善するためにも、運動をして体を動かすことが効果的だと考えられています。

そのため、スーパーデイようざん双葉では、気候やご利用者様の体調を見ながら、散歩の機会を数多く取り入れています。

幸いなことに、スーパーデイようざん双葉の近くには、ほとんど車の通らない安全な散歩コースや、疲れたら一休みできる地域の公園や公民館が近くにあり、長いときは休み休みゆっくりと、地域の方々とのコミュニケーションを取りながら、約1時間かけてご利用者様と一緒に歩きます。

散歩中は、外の景色や季節の花々を見て、綺麗だね〜と喜ばれるなど、季節感を感じたり、気分転換にも一役かっています。季節感を感じることで、脳への刺激や、散歩により全身運動・筋力維持、日中活動的に過ごし夜間良眠などの効果も期待できます。

<考察・まとめ>

一口に認知症と言っても、おひとりお一人様々な問題を抱えていらっしゃいます。その人がその人らしく笑顔で過ごすためには、どのような環境や支援が必要なのか、日々試行錯誤しながら、ケアにあたっています。

時には、その人にとって良かれと思った行動や声掛けが、逆に不安や、焦りを感じさせてしまうことがあります。そんな時は、一緒に不安や焦りに付き合い、時には涙と一緒に流して、その人の思いを受け止めます。

もちろん、楽しい時は一緒に沢山笑います！明るく、前向きに、が認知症ケアの基本だと思います。

ご利用者様は日々、環境や状態により変わっていきます。これまで通りのケアでもその日、その時で変わってきます。私達介護職は常に Plan(計画)・Do(実行)・Check(評価)・Action(改善)を繰り返しながら、すべては「主権在客」の理念の元、その人らしく日々前向きに、をテーマに一緒に笑い、時には涙しながら、過ごしていける様、頑張ります！

みんな、これからも一緒に笑おうよ！

ご清聴ありがとうございました。

私たちができること ～在宅生活継続への支援～

ケアサポートセンターようざん石原

発表者：山口 栄

恩田 寛

【はじめに】

人は誰でも住み慣れた環境や自宅において思いのまま自由に暮らしたいと願うものである。しかし認知症により生活の様々な部分への管理ができなくなるとその願いは絶たれてしまう。

今回、認知症でありながらも暮らし慣れた自宅で生活をさせてあげたいと願う二人の息子たちの要望を受け、本人への安全確保を行いながら生活管理支援に取り組んだケースを紹介する。

【利用者紹介】

A様 77才 女性 要介護4

既往歴：アルツハイマー型認知症、高コレステロール血症、高血圧症

【生活歴と利用経緯】

市内に生まれ育つ。都内の大学を卒業し栄養士の資格を取得。父親が経営する寿司屋で働いていた。結婚後は実家で両親と婿養子、二人の息子と暮らし、息子たちを大学まで進学させ順調な生活を送っていた。しかし父親、夫と次々に先立たれ、母親も最終的には特別養護老人ホームに入所後亡くなっている。二人の息子はそれぞれ別々の場所で独立している為、A様は平成20年頃より認知症の診断を受けながらも独居生活を強いられていた。

平成28年10月15日、居宅介護支援事業所Dの担当ケアマネジャーより相談を受け、その後長男より「これまで入所も考えたが認知症である母を何とか在宅生活させながら柔軟支援で支えてもらえないだろうか」との要望を受け、平成28年11月1日より利用開始となる。

【認知症独居の生活を支えるための問題点とその対応】

- ・食事：食材管理、調理ができない
 - 朝昼夕3食の提供で対応
- ・入浴：自宅において入浴の準備、実施、風呂場の管理ができない
 - 週三回事業所にて入浴を提供することで対応
- ・排泄：尿失禁、放尿、ろう便など排泄機能、衛生管理が薄れている
 - 定期的排泄介助を行い、必要時汚染衣類管理を行う

- ・薬管理：薬管理、服薬管理ができない
 - 薬は事業所で全て預かり管理し、毎日の服薬支援を行う

- ・金銭管理：通帳、印鑑、キャッシュカード管理ができない
 - 二人の息子によって管理する
 - 購入が必要な物は息子たちによって購入する
(息子たち了解のもとこちらで立替え購入も可能)

- ・受診：一人で受診することは困難である
 - 医師との交流も含め息子たちが交代で携わりたいとの意向。

- ・安全確保：今のところ敷地内から出て行くことはないが徘徊のリスクはなくなっているわけではない
 - 7時～19時までの通い利用と、週一回の宿泊を組み合わせ対応。
 - 自宅に滞在する時間を少なくし、自宅滞在時には訪問により安否確認を含めた宅内支援行う。
 - 下肢筋力低下防止を意識したリハビリテーションの実施

- ・自宅の戸締り：自宅の戸締り、カギ管理ができない
 - 家族から合鍵を預かり管理し戸締り支援を行う

- ・衣類の管理：洗濯など衣類衛生管理ができない
 - 衣類をはじめとする必要な洗濯物は事業所へ持ち帰り洗濯する。
 - 着替え用の衣類を季節ごとに入れ替えながら何組か事業所にて保管管理する

- ・自宅内環境管理：尿失禁、ろう便があり寝具やソファなどが汚染されていることがある。
 - 送迎時、訪問時、対応した職員にて清掃を行い対応する。
 - 配食、排泄介助時発生するゴミはその都度事業所へ持ち帰る
 - 二人の息子が時々訪れ環境整備を行う

このようにA様は認知症の進行とともに日常生活における管理能力が乏しくなっている状態である。一つ一つのできることを踏まえ私たちがチームとしてできることを検討提供し、A様の当たり前の日常が継続できるよう支援していくこととした。

【目標】

認知症独居生活でも安全な日常が継続できるよう生活管理しながら関わり支援する。

【取り組み】

目標を前提に本人の問題点とその対応支援を週間計画へ置き換えプラン作成してみた。

【帰宅支援】 着替え 空調環境 整備 就寝介助 戸締り	【帰宅支援】 着替え 空調環境 整備 就寝介助 戸締り	【帰宅支援】 着替え 空調環境 整備 就寝介助 戸締り	【帰宅支援】 着替え 空調環境 整備 就寝介助 戸締り	【帰宅支援】 着替え 空調環境 整備 就寝介助 戸締り	物確認 ゴミ類確認 着替え (必要時) 戸締り 18:00 夕食提供 【宿泊】	18:00 訪問 【訪問支援】 排泄介助 汚染洗濯 物確認 ゴミ類確認 着替え (必要時) 夕配食 戸締り
--	--	--	--	--	--	--

月曜から金曜までは朝7時に自宅へ迎えに行き外出支援後お連れ出し、夕食後まで事業所で過ごして頂き19時に自宅へ送らせて頂き帰宅支援ご帰所。

土曜日は朝7時に訪問し本人へ排泄介助・宅内支援・朝配食、12時にも訪問し排泄介助・宅内支援・昼配食・服薬支援、更に15時に自宅へ迎えに行き外出支援後お連れ出し宿泊入り。

日曜日は朝10時に宿泊明けで自宅へ送らせて頂き帰宅支援後帰所、12時に訪問し排泄介助・宅内支援・昼配食・服薬支援、18時にも訪問し排泄介助・宅内支援・夕配食させて頂く。

その他、突発的な変更等にも柔軟に対応させて頂くことを基本とした。

以上のように一日一日の支援を達成させ、一週間の支援につなげ、週間支援継続から一か月の支援につなげ、一か月の支援継続から一年の支援につなげて行きながらA様も日常生活支援を継続させて頂くこととした。

【考察】

A様の認知症は進行形である。現状は自宅、敷地の感覚がある為この支援内容で安全な生活が達成できているが今後はその感覚さえも無くしてしまう状態になって行くかもしれない。A様の身体と精神状態を常に注意深く観察し、その都度チーム支援内容について話し合い、必要とされることについては柔軟に変更対応して行くことが不可欠であり、常に課題として求められるところである。

【おわりに】

住み慣れた地域や自宅で暮らしたいと思う気持ちは認知症という病気の中でも崩

れない人としての本質の思いであると思う。しかし認知症の進行により思い通りにならなくなってしまったその生活はリスクと悲しみに満ちている。私たちはそのリスクに対して小規模多機能型居宅介護だからこそできることを導き出し、柔軟で多彩な支援で利用者様、ご家族様の気持ちに寄り添いながらこれからも丁寧なサービス提供ができるよう努力したいと思う。

一人ひとりの望む思いと笑顔の為に。

「ばあさん」充実した暮らしを送りたい

ショートステイようざん

発表者：清水 栄一 チャン ゲット クエン

《はじめに》

「ここはどこ？」「家族はどこにいるの？」何もわからない中、知らない人たちに囲まれながら日々の生活を送るとしたら、どのように感じますか？自分のいる場所がわからない、知っている人がいない。不安や恐怖、どうしたらいいかわからない気持ちになると思います。

反対に、あなたにとって居心地がよく、安心できる場所はどこでしょうか？多くの人は家や家族のもとに帰りたいと感じると思います。

本事例では、Y様に帰宅する機会を作り、家族との関わりの中で安心して生活して頂きたい。職員にも冗談を話して笑い声の響く元気だった頃のように戻って頂けるよう支援した取り組みについて紹介します。

《利用者紹介》

Y様 男性

要介護5

年齢：89歳

既往歴：アルツハイマー型認知症、リウマチ、心房細動、蓄膿鼻茸

生活歴：会社勤務。歌を歌うことが好き。

《利用の経緯》

平成29年頃から妻と孫の姿が見えないと落ち着かなくなり、妻は通っていた民謡と三味線に行くのを控えはじめた。同年12月よりデイサービスの利用を開始する。デイサービスには家族の促しなしでも継続して利用する事が可能であった。しかし徐々に歩行のふらつきや見当識障害がみられるようになり、夜間トイレの場所が分からず寝室内で失敗してしまう事や夜間に外出してしまうことが何度も発生するようになる。常時見守りと指示が必要になり、妻の介護負担軽減を目的に令和2年1月14日よりショートステイを利用開始する。

月に15日程度利用され穏やかな日々を過ごされるも、認知機能の低下により声掛けを行っても内容を理解できないことが多くなり、それに加え視力低下と幻視が見られた。家族がそばにいないと状況が理解できず不穏になり、大声での人呼びと立ち上がりが頻回に見られるようになった。

身体機能低下が進行した事に伴い、身体が右側に傾き、立ち上がり時と歩き出し時に

ふらつきがみられ、足が前に出ない事や、すり足になり歩行困難な様子が見られる。

妻が高齢の為、2人で過ごす時間帯に介助しきれず、自宅での生活する事が困難になりはじめた。本人の安全確保と家族の介護負担の軽減のため、介護老人保健施設や特別介護老人ホームに入所するように検討する。しかし、ご家族様には時々でいいから家に帰って来てもらいたいという想いがあることを、ショートステイに相談して下さり、令和2年8月15日より月に一度帰宅し、今後も継続して利用する運びとなった。

《課題》

普段過ごされていた環境から離れ、妻とお孫様の顔を見られず、不安を感じている Y 様。

御家族様に会う機会を少しでも増やし不安と孤独感を軽減し、元気だった Y 様に戻っていただきたい。

《施設内での様子》

長引くコロナ禍、近くに住んでいても会うことが難しい環境。家族に会いたいと強く願っていても会えず。寂しい思いを抱えていた。「ばあさーん」、「ばあさーん」何度も大きな声で妻を呼んでも会えない。徐々に不穏になっていく姿に、不安や苛立つ様子が強く見てとれた。職員は Y 様に対し傾聴する事しかできずにいた。

そんな中、左胸に帯状疱疹による水疱がいくつも見られはじめ、38度近くの高熱が出てしまう。すでに患っていたリウマチの痛みも加わり、身体を少し動かすだけで強い痛みの訴えがあるため、日中通して居室対応。念願であった退所日も延期となってしまう。

嘱託医により外用薬を処方して頂くも、かゆみの為掻いてしまい悪化してしまう。食欲が低下し、介助しても食事を吐き出し、口を開けて下さらず食事を召し上がれない。ペースト食に変更するも状況は変わらず。数日後、午前と午後、少量の嘔吐2回とおやつ時に中量の嘔吐を確認する。

バイタル確認し38度近くの高熱がみられクーリング対応するが、徐々に元気がなくなりはじめ、その1時間後、肩で呼吸しているような症状がみられた為、嘱託医に報告し、救急搬送にて黒沢HPへ搬送する。X-P撮影にて肺炎と診断されるが、以前入院した事がある協立Hpへの入院を勧められ入院される。

(ケア記録)

令和2年10月29日 左胸にいくつもの水疱見られる。37.3度熱発あり。嘱託医往診にて左胸に帯状疱疹が出来ていると診断され、内服薬と外用薬を処方され塗擦。

18:10 Kt:37.2

10月30日 1:02 Kt:37.1 帯状疱疹が広がり、左腕上腕にも出来ている事を

- 確認する。(Am : 37.3 Pm:36.8)
- 11月3日 帯状疱疹が治りつつあったが患部かゆくて痒いと訴えながらかいてしまう。
- 11月5日 20:10 居室よりうなり声聞こえ訪室。声掛けするも返答なし。熱発みられたため額に冷えピタ貼付。(Kt : 37.1 Bp : 144/66 P:90 Spo2:95%)22:30 Kt : 37.4
- 11月9日 左胸の帯状疱疹からの発疹が少量になるが痛みの訴え続く。
- 11月23日 痛みの訴え落ち着かれ食事の時間はホールにて対応開始様子を見る。徐々にホールで過ごす時間を長くし様子を見る。
- 12月8日 入浴時湯船から上がった瞬間意識喪失あり。声掛けに対しても反応鈍くのぼせた様子。3分程度で意識戻り、会話ができるまで落ち着かれる。(P : 102 Spo2:95%)
- 12月12日 昼食時より介助にて食事を召し上がって頂くもあまり召し上がって頂けないこと見られ始める。(朝:4/6 昼:2/2 夕:4/4)
- 1月11日 14時 排泄交換時ベット上にて体位交換すると少量の食物残渣物を確認する。ベッドの頭側ギャッチを上げてバイタル測定。(Kt:36.7 P:91 BP:111/80)嘱託医よりおやつは中止。食事はあまり無理しないように少量召し上がるよう指示あり。水分もとろみをつけあまり無理しないよう飲用して欲しいと指示あり。
- 15時03分 トロミのついたお茶を1くち口飲んでいただくと、中量の食物残渣物確認。声掛けに反応あり。顔色口唇色特にお変わりなし。バイタル測定。(Kt:36.5 P:94 BP:120/66)
- 17時20分 少量の食物残渣物確認。夕食は中止し、夕食薬のみ服用して頂き就寝して頂く。(Kt:36.8 P:90 BP:128/78)
- 23時02分 排泄交換時、少量の食物残渣物確認する。バイタル測定をし、熱発されていたのでクーリング行い様子観察する。(kt:37.9 P:112 Bp : 125/76)

1月12日 5時02分 熱発みられていた為バイタルを再度測定する。
引き続きクーリング対応。
(Kt:38.5 P:105 Bp:122/82)
7時 バイタル測定(Kt:38.3 P:108 Bp:122/82)
11時 バイタル測定(Kt:38.4)
朝食、昼食ともに召し上がって頂けず、水分のみ摂取して頂く。
12時 声掛けには反応あるが、午前中と比べて少し元気がない
様子見られる。(Kt:37.9 P:96 Spo2:93%)
13時 午前中に比べて意識反応 少し鈍く、肩で呼吸している為、
救急搬送。
14時30分 黒澤 Hp に搬送。X-P 撮影にて肺炎と診断。以前入院した
事がある協立 Hp への入院を勧められ入院される。

1月25日 11時45分 HP より直接ショートステイへ入所される。
目をパッチリ開け、声掛けに返答されること良好。
食事は介助するも変わらずあまり召し上がって頂けず。
日中通して37度代の熱発みられる。

1月26日 朝・昼食ともにあまり召し上がって頂けず。(朝食:3/3 昼食:1/1)
退院されて直ぐの為、居室静養して頂き様子を見る。
17時 夕食になるため離床介助中 意識消失。

1月27日 目を明け、コミュニケーション良好。返答される姿見られる。
相変わらず食事は介助行方があまり召し上がって頂けず。

1月28日 日中通して居室対応。独語多く見られる。食事摂取量は
変化みられない。

16:30 あまり食事を摂取して頂けない為、介護士と看護師、管理者と話し
合いY様が好きな食べ物は何だったかを記録から追う。
甘いものがすごく好きだったため、食事量を嘱託医に相談し、
エンシュア缶を夕食時より試しに引用して頂く。

《退院後の対応・結果》

入院時は経口摂取禁止だった為しばらくは点滴対応になり、嚥下機能の低下がみられ固形物を摂取することが困難になり今後、ショートステイを利用する事が難しいと判断し、カン

ファレンスでは、今後は療養型へ転院することも視野に入れ話し合いが行われた。カンファレンスの中でご家族様は、慣れたショートステイを引き続き利用していきたいと希望される。その旨を受けショートステイでは管理者と看護師、介護士と話し合いが行われ、ペースト食を摂取できるようになったら受け入れをすることになる。

退院後は、職員の声掛けにも目をパッチリ開け、しっかりと受け答えされるが居室に1人での時は「おばあちゃん!」「どこいった?」と声が多く聞かれた。翌日の夕方車椅子へ移乗する際一瞬意識喪失されること見られたため居室対応に戻る。傾眠されることも多く見られ始める。

食事意欲は変わらず低下しており声掛けし召し上がるよう促すが、あまり食事を摂取して頂けない為、徐々に元気がなくなりはじめ、介護士と看護師、管理者と話し合い Y 様が好きな食べ物は何かを記録から追う。甘いものがすごく好きだったため、食事量を嘱託医に相談し、エンシュア缶を試してみる。はじめはエンシュア缶を吸い飲みで提供するが上手く摂取できず試行錯誤の結果エンシュア缶をゼリーにして提供するとスムーズに摂取して頂けることが出来た。朝と夕にエンシュアゼリーと昼にペースト状の食事に変更して対応し徐々にエンシュア缶はゼリーではなくそのまま摂取して頂けるようになる。

食事以外でも職員が傍で声掛けを行い寄り添うことで覚醒される時間も徐々に増えて来られ、表情明るくなり始める。少しずつ食事摂取される量も以前に比べると多く召し上がって頂けるようになってきた。

ベッドに横になりながら笑顔で敬礼を職員にする状態まで回復され数日後、御家族様とケアマネージャーに連絡を取り帰宅日を調整し念願だった帰宅を実現することが出来きました。

帰宅後はご家族様全員に出迎えてもらい数カ月振りに奥様と会えて奥様の元気な様子を見て安心して、照れながらも嬉しそうにされていました。

《考察・まとめ》

私たちにとって1番安心して、自分らしく生きていける場所。それはご自宅です。なにより多くの時間を過ごし、見慣れた人たちに囲まれる事で気を遣わずにのんびりと過ごせることが出来る。自分がリラックスできる場所でストレスなく充実した生活を送ることが出来ることを今回の事例を通して深く認識する事が出来ました。今後も Y 様の笑顔を守り、少しでも安心して過ごして頂けるよう努めていきたい。

自由気ままな生活が大好き

～本人の幸せのための支援～

ケアサポートセンターようざん栗崎

柴田 健吾

横山 求枝

はじめに

今回紹介する A 様はようざん栗崎を利用開始するまで、ずっと 1 人で自由な生活を続けてきました。自由な生活といっても平坦なものではなく、交際していた男性からの DV や貧困生活など苦しく貧しい生活を乗り越えて手に入れた生活です。

波乱万丈の人生を送ってきた A 様は自分が辛く苦しい時でも他人を思いやることができ、笑顔を絶やさず優しく、芯の強い方です。A 様といるとこちらまでパワーがもらえます。

そんな A 様が認知症状が出て身体が不自由になっても笑顔を絶やさず自由気ままに好きな事をして過ごして頂けるように農業の技術を持った新人職員が A 様と共に「幸せのための支援」作りを行った取り組みを発表させていただきます。

1 A 様の紹介

利用者様…A 様

年齢…80 歳

要介護度…要介護 2

日常生活自立度…J2 認知症生活自立度…II b

家族構成…一人暮らし

結婚歴もなく子供もいない

既往歴

認知症（平成 31 年 3 月頃）

大腿骨骨折（60 歳頃）

腰椎圧迫骨折（令和 2 年 10 月）

処方薬：処方薬はなし。

体調が悪い時に自己判断で市販薬（風邪薬・痛み止め）を使用している。

生活歴…

4 人姉弟の次女。若い頃は東京で働き、男性と同棲していましたが男性は仕事をせず紐状態で DV がありました。その後、群馬に戻り温泉等で住み込みの仕事をされ 20 年前に団地で節約しながら一人暮らしをしていました。しかし、日常生活がなり立たなくなり 5 年前に自ら市役所に行き生活保護の申請し生活を送っています。

2 ケアサポートようざん栗崎利用の経緯：

物忘れが目立つようになり、平成31年3月頃外出をしても市外で迷い警察に保護されることがありました。

金銭面に関しても管理が困難になり高額当選の手紙をうのみにしてしまい、定期的に金銭を送付してしまったり、地域の住民から金銭の授受もあり、A様はなかなか断れずいました。

火災の危険が高く、認知症状が出現している為在宅生活に大きな不安がありましたが、A様はサービスの必要性を感じていませんでした。判断力の低下あり介護サービスを進める必要がある為、高齢者あんしんセンターより本人の生活状況から柔軟に対応できる小規模多機能の提案がありその後、当施設に相談があり令和元年7月15日より利用開始になりました。

3 サービス開始時の様子

サービス開始時は週2日の入浴目的の半日利用の通いとそれ以外の日は全て訪問で行っていましたが本人様が自転車に乗り、自由に買い物に行くことが多く、訪問時、不在や、来苑拒否などがありました。また長時間スーパーに滞在することも多くありました。

そのため、道に迷う事もあったためGPSを持って頂き、安心センターと連携を取ったり、職員が直接スーパーに行き、帰宅を促したり送迎を行ったりしておりました。

4 腰痛後の様子

令和2年10月腰痛の為整形外科へ受診し、腰椎圧迫骨折と診断されました。それまで、元気だったA様ですが、以前のように活動出来なくなりました。その為、通いの日を週4日の1日利用でそれ以外の日が訪問に変更しましたが、ようざん栗崎の通いの日に迎えても、拒否が強く月に2回位しか来苑して頂けない日々が続きました。

A様腰痛後の課題

- ①足腰が弱くなり腰の痛みと共に、自由に行動が出来なくなっている。その為、自宅での活動量も減りコタツで座っている時間が長くなってしまった。寝室が2階にあるが、夜もコタツで寝てしまっている。
- ②動く意欲が減りお迎えに行っても、「風邪気味だから…」「腰が痛いから…」と話され、来苑拒否が続くときがある。
- ③ご自身で食事を召し上がる事が少なくなり、栄養バランスがとれず水分摂取も少ない。
体重が減少してきている。(昨年と比べ、体重が-6.1kg減少)
- ④腰の痛み、足腰が弱くなってきた為以前のように思うように畑仕事が行なえず、管理が出来なくなっている。
- ⑤冷蔵庫の中身を管理できず、在庫が賞味期限切れになる事が多い。また、作り置き料理

を長時間残し続け、捨てない事が多い。

- ⑥自転車に乗れない為、買い物やATMに行けないのでご自分歩いて行こうとするので危険である。

お金をどこにしまったのかわからなくなり金銭の管理ができなくなってきた。

- ⑦環境整備が出来ない。ゴミ出しが出来ず、ゴミが溜まっている。部屋の掃除や片づけが出来ない。

ようざん栗崎での取り組み

- ①②

腰の痛みが強くなり横になっていることが多く、自宅に迎えに行っても離床するまでに時間がかかる為、朝の送迎時間を遅く変更し介助の際も本人の気持ちに向くように、声掛けを行いました。また歩行も困難の時があるので、車椅子を持参し状況によりお連れしました。

お迎えに行っても「風邪気味だから…」「腰が痛くて…」と来苑拒否が続く時もありましたので、その際は訪問に切り替え家事援助を行い自宅で過ごせるようにしました。

- ③ようざん栗崎の配食にて栄養をとって頂こうとしましたが、持って行ってもほとんど食べなかった為、職員が食事をおじやを作ったり、蓋付きストローコップを使用しジュースを飲んで頂くなど、その時に合わせたケアを行い、A様に栄養と水分を摂って頂きました。
- ④自ら畑に出て野菜の収穫が大変な為、本人様に畑の様子を見てもらいながら職員が収穫し食事に使用しています。
- ⑤食事を作った日時を記入し、傷んだ物は本人に確認しながら捨てています。
- ⑥弟夫婦がお金を管理している事を伝えたり、必要な事をメモ書きにし部屋に置きA様がわかるようにしました。
- ⑦訪問時ゴミの分別や、衣類の片付けや洗濯、台所の掃除、ガス台が危険な為卓上コンロの火の確認を行っています。

ようざん栗崎への通い利用を促し利用することによって、動く機会を増やしていき活動量を増やしました。利用時間も時間で縛ることなく、臨機応変に対応しA様が負担なく過ごせるよう支援させて頂きました。

家族の協力と連携

- ①A様が腰痛の為自転車にのることが困難になりましたが、いつでも自転車に乗れると思っており、無理をしてでも出かけてしまうことがあった為、弟夫婦に何度も説得していただき、自転車の鍵を預かっていただきました。
- ②ご自身で買い物に行けないので弟夫婦が毎週火曜日に自宅に行き、A様から買い物リス

トを預かり購入してきてくれます。その際、賞味期限や食材の確認もして下さり A 様に伝えて頂いています。

③お金の管理も難しくなってしまったので ATM の出し入れ等を弟夫婦が管理しております。

5 本人の幸せのための取り組み

3月頃から A 様の腰の痛みは軽減してきたようで畑仕事や食事も意欲的になってきたため、

生きがいである、「野菜作り」をもう一度出来るよう支援することが本人の幸せを守るために必要であると考えその為の活動を実践しました。

☆野菜作り☆

職員の S 職員はようざん栗崎に勤める前まで 50 丁部の畑で様々な野菜作りをする農業生産法人に勤めていたので、専門知識と培ってきたプロの技術を活かし、A 様のやりたいことや、農業の専門用語などをくみ取る事が可能です。そこで、畑を耕すなど腰の痛みで

きないところは職員がプロの技術を活かし、平^{てんぐわ}鋤などの専門道具を使い、本格的に支援

し、化成肥料まきなど、本人様のできるところは一緒にやっていただきました。

本人様にどこになにを植えるかなど指示を仰ぎ一緒に植えました。

また、すでに収穫時期の来ている里芋などの作物を本人様のサポートすることで、ご自身で収穫して頂きました。

本人が好きな野菜を植えるために

A 様は野菜作りに強くこだわりがあるので、納得のいく種子や堆肥等の肥料を選んで頂く為、車椅子を使用し、職員が寄り添うことで買い物をして頂きました。

収穫した野菜を利用しての料理

A 様が困難な収穫を職員が行い、収穫した野菜を使用し A 様と一緒に調理し、楽しんで頂きました。

S 職員プロフィール

農業高校、農業専門学校を卒業し農業生産法人に令和元年 7 月まで勤める。

保持資格はフォークリフト作業用免許、大型特殊自動車免許、農業技術検定 2 級、危険物取扱者乙種 4 類など。生産していた作物は、ナス、ピーマン、きゅうり、甘唐辛子、ズッキーニ、じゃがいも、白菜、キャベツ、インゲン、枝豆、小ねぎ、ねぎ、リーフレタス、ハウレン草、小松菜、菜花、春菊など。

考察

腰痛後以前のように A 様の生きがいの畑や大好きな買い物がもう一度行えるように、A 様の畑作業を農業の専門知識・技術をもつ職員が寄り添い A 様が出来ない所はお手伝いさせていただきます、畑作業をもう一度行う事が出来ました。腰に痛みが時々ありますが、大好きな畑仕事になると痛みよりもやりがいの方が大きくなり、A 様にとって大切な充実した時間だと思いました。

また A 様は買い物も大好きでしたが、腰痛の為長時間の歩行が困難となりましたので、車椅子に乗っていただき職員が寄り添いながら買い物をすることで楽しみ、いきいきとした笑顔になりました。

食事の面では食べたい物を職員と一緒に調理し、庭の畑で収穫した野菜を料理に使うことにより食欲もわき体調も回復し、今現在では料理を自分で作れるようになりました。

まとめ

利用開始時は認知症により、一人では生活が出来ない為小規模多機能を利用され、地域住民とあんしんセンター・民生委員・市役所が連携を取り、共に見守って行くことによって自由な生活を謳歌していました。腰痛後以前のような自由な生活を送れなくなってしまいましたが、ご家族様の懸命な協力とようざん栗崎の臨機応変なケアによって日常生活が送れるようになりました。

好きな事が行なえるようになった結果、活動性が増え以前は殆ど参加しなかったようざん施設内のレクリエーションや普段の会話の中でも積極的に参加され多く笑顔がみられ、A 様からも前向きな意見が沢山でるようになりました。自分が好きな事をする事、心から楽しめる事を行なう事は人生を前向きに生きる為には、とても大切でその為の支援をしていくことが介護をしていくうえで必要なことだと A 様の事例を通して学ぶことが出来ました。

畑作業が趣味の利用者様は他にもいらっしゃいますので、今後のレクリエーションや自宅に訪問で伺い農業の技術を持った職員がその利用者様にあったお手伝いさせて頂くことも考えております。

今後も A 様の心からの幸せな日々が安心して楽しく送れるように、ご家族や地域の方々と連携しケアさせて頂きたいと思っております。

「その人を知ることによってそれは問題行動ではなくなった」

～ 観察力と理解力の大事さ ～

特別養護老人ホームアダージオ

発表者：飯島志保子

関口由紀子

【はじめに】

問題行動等により1年間6か所の病院や施設を転々として迎え入れたA様に対し、どのように接していけば、安心、安全、穏やかに生活することができるかを職員全員で模索していく一部事例を紹介させていただきます。

【利用者様紹介】

氏名：A様

年齢：82歳 男性

要介護度3

車椅子使用

【生活歴】

水道屋の仕事をしていた。妻、長女親子と6人家族で生活していた。本人は自由気ままに、地域を歩き回ったりデイサービスに通ったりしていた。長女は統合失調症で入退院を繰り返していた。長女とは同居していたが一切関わりを持っていない。1階と2階で全く話すことなく生活していた。

【入所歴】

H29.2/2 入浴しようと浴槽に入り、熱傷（両側足部・左手・陰部・臀部）。A病院に搬送され、B病院に転院、その後、C病院に転院し、更にリハビリ目的でD病院に転院。その後E老健施設に入所後、特養の空きを待つため、Fショートステイを利用。

H30.2/18 モデラート ショートステイを利用

H30.4/15 特別養護老人ホームアダージオ入所

【既往歴】

不詳 左手第1・2指 欠損（障害等級4級）

平成15年 高血圧症・蕁麻疹・統合失調症・不眠症

症候性てんかん・糖尿病・認知症・脳挫傷

平成29年 熱傷（両側足部・左手・陰部・臀部）

【問題行動】

① 収集癖

- ・紙類を見つけると沢山取り、使用せずに丸めてズボンのポケット内にしまいこむ。

② 迷惑行為

- ・他の利用者様の居室や使用中のトイレのドアを開けてしまうこともあり、他の利用者様より苦情がある。
- ・洗面台の水を出しっぱなしにすることがある。
- ・トイレの便器内に、ティッシュや紙類等を流すことがある。

③ セクハラ行為

- ・女性の利用者が必要以上に近づいたり、女性職員の身体に触れたりすることがある。
(注意すると、笑いながらその時は理解できる。)

このような問題行動により以前の入所先で、看護・介護職員の指示を守れず離院を繰り返す。

【平成 30 年時の内服薬】

【令和 3 年現在の内服薬】

バルサルタン錠 80mg 1錠	バルサルタン錠 80mg 1錠
エクア錠 50mg 2錠	←なし
アムロジピンOD錠 5mg 2錠	アムロジピンOD錠 5mg 2錠
アレビアチン散 10% 0.5g	アレビアチン散 10% 0.5g
フェノバル散 10% 0.2g	フェノバル散 10% 0.2g
ロゼレム錠 8mg 1錠	ロゼレム錠 8mg 1錠
オロパタジン塩酸塩OD錠 5mg 2錠	オロパタジン塩酸塩OD錠 5mg 2錠
ピサコジル坐剤 10mg	酸化マグネシウム錠 330mg 1錠
追加→	エブランチルカプセル 15mg 2カプセル

【職員との関わり・考察・取り組み】

- ① 職員が、A様の行動に対して声掛けをした時、それが気に障ると、周りにある手に持てる物であれば、櫛・コップ・椅子等、または自分が履いている靴を脱ぎそれを職員に投げ、暴力を振るおうと暴れる。

例1 歯磨きが終わりテーブルへ誘導するもそのまま再度洗面台へ向かうところを

「今歯磨き終わったところだからテーブルへ行きませんか」

例2 ペーパータオルを何枚も取ってはポケットへ入れて繰り返しているところを

「Aさん、そんなに取っちゃだめですよ」

例3 トイレ内でトイレットペーパーを引き出し、それを切り取る様子もなくそのまま便器内に永遠入れているところを

「Aさん、トイレが詰まっちゃいますよ」

<原因>

A様が、やりたい事を妨げられる事により暴力をふるっていた。

このように、A様の行動を妨げることで暴力的になるため、それをしないように声掛けの工夫を行いました。

A様の日頃の行動を観察していると、洗面台で水いじりが好きで、その際そこに置いてある物をよく整理整頓を行っている。ペーパータオル等の紙類を必要以上に取り、ポケットにしまい込んでいるが、それとは別に周辺を拭いていることもみられる。小さなゴミを見つけてはそれを拾って捨てていることも見られる。就寝時には、自身の脱いだ靴をしっかりと揃えて置いている。このことから、A様はとても几帳面な方に思えます。

そして、A様の行動に対して、妨げるような否定的な声掛けでなく「ありがとう」と、感謝の言葉掛けに変えてみました。

例1 歯磨きが終わりテーブルへ誘導するもそのまま再度洗面台へ向かい水いじりやコップをいじっているところへ

「Aさんありがとう、もうすぐ食事です、テーブルへ行きましょう」

例2 ペーパータオルを何枚も取ってはポケットへ入れて繰り返しているところを

「Aさんありがとう、そろそろテーブルへ行きましょう」

トイレットペーパーの引き出しについては、使用せずそのままゴミとなってしまうことが多い中で、よだれを拭いている姿もよく見られました。

このことから、よだれが拭けるようにご自身のタオルを渡してみました。

目の前にトイレットペーパーがあるとペーパーに集中してしまうため、ペーパーを外し、見えるところには置かず、必要な分を職員が提供するようにしました。

② 女性利用者様との関わり

入所前の情報通り女性利用者様に対しセクハラ言動をたびたび行っている様子が見られました。

<原因>

早くに妻を亡くしたので寂しいのでは？

このように、女性利用者様に近づけないよう日中は職員目の届くソファでくつろいでいただく。

③ 女性職員との関わり

入所前の情報通り女性職員に対しセクハラ言動を行っている様子が見られました。
身体介助がまだ少ない方なので距離を保ち接するようにしている。

【まとめ】

声掛けの工夫で暴力的になることが少なくなりました。

ペーパー類が視界に入らない工夫をすることで紙への執着が減りました。

必要であれば職員が取って差し上げる。

時々暴力的になることや、セクハラはあるものの、当初は、色々と問題だらけであったが、
今では、日中はソファでテレビ鑑賞や、他の利用者様と楽しそうに会話される様子もみられ、
職員とコミュニケーションもとられている。もしかしたら、入居者様の中で一番職員と
顔を合わせコミュニケーションもとっているかもしれません。こうしてこのままA様・職員
共に楽しく穏やかに日々を過ごしていけたらと思います。

ご清聴ありがとうございました。

「その人らしさ」を支える

グループホームようざん八幡原

発表者：高橋龍之介

石綿宏茂

《はじめに》

ご利用者の「その人らしさ」を支えると考えた時に何を思い浮かべますか？誰もが当たり前にしてきた自宅での生活。食事・入浴・洗濯・歯磨き、、、私たちが今現在生活するうえで当たり前に行っている事は、ご利用者様にとっても当たり前のことなのです。施設入所したから職員が全てを行ってしまうのではなく、施設入所したからこそ、その人が今まで当たり前にしてきたことをいつまでも続けてほしい。その人らしさとは何か、一人一人の人生に寄り添い、試行錯誤しながら取り組んだ日々の事例を紹介してきます。

《事業所紹介》

2019年4月開設の1ユニット定員9名の2ユニット型のグループホームです。

《開設からの経過》

「当り前の生活を当り前に」グループホームようざん八幡原の事業所理念です。開設当初はご利用者のペースではなく業務に追われケアも業務となってしまう、ご利用者が怒り出してしまうことも多く転倒事故も絶えず起こっていました。ご家族様からの指摘も多くありました。ですが、日が経つにつれ少しずつ私達にも余裕ができご利用者様と向き合える時間ができ始めました。日々の気付きの中で皆と話し合い模索する事で、段々にご利用者様に寄り添う事が出来る様になりました。事業所一体となってケアが出来る様になるまではかなり時間がかかりましたが今では事業所理念を基に「人として当り前のことを当り前に行って頂く事」、「常にご利用者のペースに合わせ無理強いはしない事」を心がけケアをしています。

《取り組み》

①食前の手洗い

洗面台で手を洗うという昔から行ってきた当り前の行動をいつまでも忘れてほしくないという思いから、昼・おやつ・夕食前に車椅子利用の方も含めご利用者様全員を洗面台にご案内し石鹸で手洗いをして頂いています。自席でのアルコール消毒のみではなく、洗面台で行う事によって短い距離ではあるが歩行の時間が確保でき下肢筋力低下防止に繋がると考えました。感染予防にも繋がっています。

②日中両ユニットの扉を開放

開設当初両ユニットの扉を締め切っており、同じ建物内でありながら別の事業所のように

感じました。閉鎖的な空間になり、より一層ご利用者様の自由を奪ってしまっていました。扉を開放した事によりご利用者様が行きたい所に行きたい時に自由に行けるようになりました。徘徊行為も運動と捉え長い廊下を行き来する事で筋力低下予防にもなり、転倒予防に繋がるのではないかと考えました。また、ご利用者様同士のコミュニケーションも増え、合同のレクリエーションも実施しやすくなり、ご利用者様の笑顔も増えました。他の方の居室に入ってしまう方や、気の合わない方同士でのトラブルも増えましたが、職員としても両ユニットのご利用者様と携わる事で事業所一体となってケアをする事が根付き情報共有がしやすくなりました。

③車椅子は移動時のみ使用

車椅子のまま食事や体操を行った方が職員にとって労力が減り楽という考えがあったが、利用者様の目線で考えた時に周りの方と違う物に座っていることへの疎外感を感じる事なく生活できるようにと実施しています。廃用症候群の予防も兼ね、椅子にて座位が保てる間は必ず移乗し椅子にて生活して頂き、車椅子はあくまで移動手段と言う意識の徹底を行いました。

④ご利用者様が出来る事は“業務”ではなく“ケア”

職員の業務であってもご利用者様が出来る事はお願いし行っています。時には職員が手直ししなくてはならず二度手間になってしまう事もありますがその人にとってのやりがいや生きがいを感じてもらえる事が私たちに出来る最高のケアではないかと考え実施しています。実際に行っている事を紹介します。

洗濯物干し、洗濯物たたみ、食器拭き、食器洗い、掃除、リネン交換、配膳用コンテナ返却

⑤買い物

現在はコロナ渦の為、自粛していますが味噌汁に使う具材をご利用者様同士で話し合い、実際にスーパーに買いに行き、野菜を手に取り選んで頂いています。購入した具材はご利用者様に切って頂き、味噌汁に使用しています。

⑥歯磨きは洗面台で行う

本人様のその日の状態を考慮しやむを得ない場合を除き、自席で義歯を外す事や口腔ケアをせずに総義歯の方や車椅子の方も必ず洗面台にご案内して口腔ケアを行っています。

⑦足浴の実施

入浴予定の方に声掛けを行った際、周りの利用者様方が「私も入りたい」と要望があったが、希望する全ての利用者様をご案内する事が困難であったため、代替えとして入浴予定のない利用者様に対して、5～10分程の足浴を始めました。

⑧毎月カンファレンスの実施

ケアマネ参加の元、ユニット毎に毎月1時間程度カンファレンスを実施しています。ご利用者様全員の現状に一番合ったケアの方法を話し合い全職員で共有しています。

⑨室内活動の充実

毎日10時、16時は体操や歌レクを実施しています。体操はDVDを流すだけでなく必ず職

員が前に出てご利用様に声をかけながら全員に参加していただけるように環境作りをしています。天気の良い日は積極的に散歩に出かけ、なるべく全員をお連れ出来る様に何往復もしています。天気の悪い日は両ユニットの廊下を往復し散歩の代替としています。午後は必ずレクリエーションを実施し、時には合同レクリエーションも行なっています

《コロナ禍での取り組み》

- ①施設内での面会が出来ない為ご家族様に説明し、窓越しでの電話面会を実施しています。
- ②3ヶ月おきにご利用様の担当職員による直筆の手紙と写真をご家族様宛に送付し、近況報告しています。

《まとめ》

他の人のものじゃないその人の生活を「その人として当たり前のことを当たり前に行って頂く事」、「常にご利用様のペースに合わせ無理強いほしくない事」を心がけケアを続けていく中で少しだけ分かった事がありました。それは、ご利用者様に振り回されることが私たちにとってその人を「支える」と言う事なのではないかと感じました。ご利用者さんの目線になりその人が好きな事を好きな時に出来る環境を皆で協力しながら作っていきたいと思います。

《おわりに》

我々が普段やっている事を利用者様にも当たり前の事として、日々の生活でやって頂ける様に試行錯誤しながら取り組んで参りましたが、それぞれの利用者様だったり、その時の利用者様の状態等によってもケアの方法は変わってくると思います。これからも失敗を重ね試行錯誤を繰り返しながら、その人にとって良いケアとは何か考えながら寄り添って行けたら介護職冥利に尽きるのではないかと思います。

介護の仕事はいつ何が起こるか分からないといつも痛感させられます。だからこそあの時こうしておけば、、、と後悔しないように共に暮らせることの感謝を忘れないようにしていきたいと思います。

1日1日を大切に「その人らしさ」を支えるために。

A 様の心に「バラが咲いた」日

～初期認知症利用者様に対するケアの実践～

デイサービスぽから
発表者 高柳 智恵
高井 恵子

《はじめに》

認知症。推計では 2020 年の 65 歳以上の 6 人に 1 人が発病すると示されている通り、誰もが抱える病気である一方、根本的な治療方法は未だ確立されておらず、ご家族様を含めた周囲のケアが極めて重要であると言われているのはご認識の通りです。ではもし、明日ご自身が認知症と告知されたら皆様はどのように受け止められるのでしょうか？今まで当たり前に出ていたことが徐々に出来なくなっていく苛立ち、居場所や役割が無くなるような不安感。少し考えただけでもいたたまれなくなる事でしょう。

今回の発表でお話しさせて頂く A 様も、まさにこのようなお気持ちの中にいらっしゃいました。まだ取り組みの最中ではあるのですが、そのような A 様と寄り添い、少しでも A 様が自信を取り戻せるようにと行っている、いくつかの内容についてご紹介させていただきます。

【利用者様紹介】

氏名： A 様

年齢： 82 歳

介護度： 要介護 1

既往歴： 関節リウマチ・高血圧・アルツハイマー型認知症

《生活歴》

群馬県藤岡市生まれ。農家の 4 女として幼い頃から農業を手伝わっていました。とても明るい性格で沢山の友人に恵まれたそうです。結婚後専業主婦として過ごす中、何か資格を取りたいと通信と夜学で保育園と幼稚園教諭の資格を取得され、その後 35 歳から 70 歳まで保育士として第一線で働かれました。趣味は日記を書いたり、新聞の切り抜きでスクラップ帳を作る事だと教えて下さいました。退職後徐々にもの忘れや被害妄想が現れるようになり、主治医の勧めで介護申請を行いデイ利用開始となりました。当初は週 2 回のご利用で現在は月～金の週 5 回のご利用となっています。独居であり、二人の娘様は週末にご本人宅を訪問し、通院や身の回りの支援を行って下さいます。

《経過》

ぼから利用を開始された際には、ご家族より「日常生活には問題ないので服薬管理をメインでお願いしたい」とご希望頂いており、行動面で特に気になる問題はみられませんでした。ただ A 様が「自分は家族の中で足を引っ張る存在なんじゃないか」「自分が壊れていくのが分かる・・・怖いですよ」等の認知症から生じる孤独感、不安感については時折職員にお話しされる事があり、気にかかっていました。A 様の気持ちに寄り添う為に比較のお話ししやすいであろう利用者様の近くにお席を用意する、洗濯を干す、たたむ等の軽度な作業をお手伝いして頂く事を職員間で共有の上、実施するようにしました。それでも A 様は不安感を払拭する事が出来ない様子で、職員一同どのような対応をさせて頂くのが A 様の為になるのか頭を悩ませている状況でした。

《取り組み》

このような状況の A 様に対して少しでも心身のケアに貢献出来る様、改めてどのような対応をとっていくかを検討しました。

① 取り組む方向性の共通認識

感情面でのフォローを目的としたお席の配置、軽度作業の依頼などは継続しつつ、今までは特段問題が目立っていなかった A 様の「行動面」に関しても一層注視していくという、共通認識を職員の間で図りました。これは毎日の申し送りの時間などを有効に活用し、特に A 様のご自宅に伺う機会がある送迎スタッフは日頃のご様子などを気にかけて、その中でケアにつながるヒントを得るようにしました。

② 「行動面」の改善を通じたコミュニケーションの活性化

そのような取り組みの中で、段々と A 様の食事の状況が気になるようになりました。ぼからでは希望者の方にお帰りの際、その日の夕食をお渡しているのですが、翌朝お迎えに伺うとそれが食べられずにそのまま残っている事が多かったのです。一日常温で置かれたお弁当を後日食べてしまい、健康被害が出てしまう事を防ぐべく、ご家族とも相談いたしました。ご家族様は量を減らして頂ければと言われましたが、やはり心配でしたので毎朝の送迎スタッフがお迎えの際に、前日の摂取量を確認して残りは回収するといったルールを設ける事と致しました。

③ 「行動面」から「感情面」のケアに繋がる糸口を掴む

お弁当に係るやりとりを実施させて頂く中で、A 様とのご自宅でのコミュニケーションも増えてきました。ある日 A 様のご自宅に長らく使われていないであろうエレクトーンがある事に気付きました。お話を聞いてみると、A 様が保育士としてご活躍されていた頃に弾かれていたもので、退職後も時折楽しまれていたとの事でした。もうしばらく弾いていないと

言う A 様の名残惜しそうな様子が気にかかりました。ちょうどその頃、ぽからの職員の家に使っていないエレクトーンがある事が分かり、後日デイに持ち込んでもらい、簡単な楽譜を準備した上で A 様に「弾いてみませんか？」とお声掛けしました。A 様はブランクもある事から、最初は遠慮なさっていたご様子でしたが、職員からの勧めもあり、かつて保育士としてご活躍されていた頃を想像してしまうくらいにシャキッとエレクトーンの前に座り、「バラが咲いた」を演奏されました。A 様の演奏は本当に感動的で職員を始め、聴かされていた他の利用者様の中でも涙を流されていた方がいらっしゃる程でした。その様子を見た A 様はとても嬉しく誇らしげな表情をされておりました。今までお話しされていた「自分は何も役に立つ事はないんじゃないか」という不安な想いに、わずかでも光が差した瞬間なのではないかと感じました。

④ 成果、さらなる改善に向けて

エレクトーンの件があって以来、段階的ではありますが職員のお手伝いを進んで下さるようになり、今までには無かった自発的な言動が A 様に見受けられるようになっていきます。職員が A 様とのコミュニケーションを密にとっており、A 様が昔ご実家の畑仕事を手伝われていたというお話を受けて、先日はぽからの畑にじゃがいもを植えるといった企画も実施しました。これには A 様は本当に生き生きと参加され、その後の収穫の際も利用者様方の中心として、率先して動いて下さいました。

《おわりに》

今回「行動面」「感情面」とそれぞれ異なる面から A 様の現状をしっかりと注視し、そこから心身のケアに向けた糸口を得ていくという有効性を実感する事が出来ました。A 様のような認知症初期の不安感、疎外感の問題は A 様だけの問題ではなく、認知症を発病された利用者様は少なからず経験される感情だと思います。個人ごとに生活環境や生い立ちも異なる為、いかに利用者様それぞれの状況に気付き、考え、いかに行動する事が出来るかが、より質の高いケアのポイントになるのかと考えています。そういったアクションを A 様に限らず他のすべての利用者様にも対応出来るよう、今後事務的作業の効率化や業務の優先順位付けなどにも取り組み、利用者様とのコミュニケーションを密に取れる時間を確保していきたいと思っております。